

をまじえて中太鼓を打ちめぐる。

○岩見重太郎(芸物) 妖怪変化の地舞につづき岩見重太郎との立回りがあり、妖怪変化(仙人姿)が退散し、かわってヒジ(猿)が登場し再び立回りのあと重太郎の追い込みで終る。  
○盛衰記「上・下」(太鼓曲) 「鉄輪」と同じ構成で二人ずつ組み、白ハリ太鼓を表裏になって相打ちするリズムの変化に富んだ曲。

○羽衣「上・下」(太鼓早打) 白ハリ太鼓が客席に向って並び表裏になって演じるテンポの最も早い曲で、交互に打ち分けるブチさばきが見どころ。羽衣伝説を表わしたものと伝える。

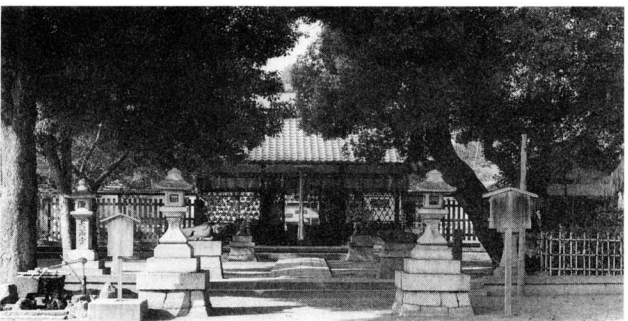
○獅子太鼓(太鼓斗打) 中太鼓四人が太鼓の打合いをみせ、終ると大太鼓が入って獅子を呼び出す。

○和唐内(芸物) 和唐内が兵や獅子と立回りの末、それらを屈服させ引き連れて都に帰るさまを演じる。

○獅子舞(曲芸) 大太鼓のはやしで登場し、後足立、前足立、獅子返り、肩立ち、孔雀などの曲技や、ノミトリなどの所作があり、碁盤乗りも演じられる。

○獅子と土蜘蛛(闘争芸物) 獅子が寝入ると土蜘蛛が現われて獅子にたわむれ、やがて闘争となりクモの巣を豪勢に撒くところで最高潮を迎え、獅子がついに敗れて終りとなる。  
○回向唄(念仏曲) 結願の念仏曲で鉦太鼓を打って納める。

この曲は上演の都合上、獅子太鼓の前に演じられることが多い。



重要無形民俗文化財指定

# 吉祥院 六齋



「特別曲」

○焼香太鼓 六齋念仏中唯一の儀式形態を残すもので、古式の装束(直垂、風折烏帽子)を着用し金、銀太鼓を用いて演じますが、これは特別の場合のほか常には上演しません。その主なものでは、慶応三年孝明天皇、明治三十年英照皇太后、昭和二十六年貞明皇后の御焼香式に夫々奉仕出演いたしました。なお六齋物故会員の供養に勤めることがあり、念仏としての形態をしつかり伝承しています。

主要年中行事

春季大祭奉納(四月二十五日)  
夏季大祭奉納(八月二十五日)

## 吉祥院 天満宮

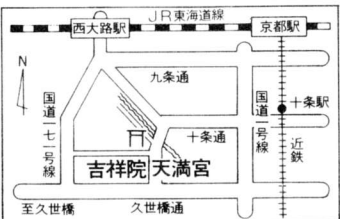
〒601 京都市南区吉祥院政所町三  
(西大路十条西入ル北)

電話 〇七五(六九一)五三〇三番  
FAX 〇七五(六九一)二二〇五番

市バス

吉祥院天満宮前下車西入  
西大路九条下車南六〇〇米  
千本十条下車西六〇〇米

J R  
西大路駅下車南へ一、〇〇〇米



# 六ろく 齋さい (略記)

## 一、沿革

六齋とは六齋念仏踊の略称で、昔仏教徒が齋戒奉仕した八、十四、十五、二十三、二十九、晦日の六齋日に行った宗教行事から起り、約千年前に空也上人が民衆教化のため京洛の街頭に立って鉦や太鼓を打ちならし読経念仏を唱えて廻ったことから始まったと伝えられています。

最初は僧俗混淆し、後に俗人のみで行なわれるようになると共に段々陽気なものになり、次に農村娯楽として工夫加味充実され、青年によって受継がれて現在の六齋にまで発展したもので、芸能色豊かな空也堂系と地味な干菜寺系とがあります。

過去京都市周辺農村各地で多数の組が組織され、江戸末期には四十組近くを数えましたが其後時勢の推移と共に都市化し、生活や趣味娯楽も変り、為に次々と消滅し、遂に現在数組を残すのみとなりました。

## 二、吉祥院の六齋

吉祥院地域では盛況時各村毎に組を持ち、爾後減ったとはいえ昭和四十年頃迄は五組を保存して居り、歴史古く、技勝

祭囃等から採り入れたもの多く、大別して笛、鉦音を伴奏に太鼓の曲打、早打、踊打を主とす太鼓曲と笛鉦太鼓の囃で行なう芸物とがあり、その代表的なものとして獅子舞がよく知られています。

上演中は殆んど無声で、古来から伝わっている唄や詩或は拍子を口ずさんで演じます。太鼓曲ではその打法により一人、二人、数人の対話を表現している場合が多く、保存全曲目(十八種)上演には概ね一時間半乃至二時間を要し発願から始めて回向唄で終わります。

練習は組員の希望と才能に応じ、笛、鉦、太鼓、獅子、其他諸芸物を分担し夫々専門的に行ないますが、楽譜が無いため独習し難く、先輩より直接指導を受け反復して会得するほがなく、中でも笛の継承には困難をきわめています。

## 四、吉祥院六齋(菅原町組)の保持曲目

### 「普通曲」

○発願はつげん 願ねが念ねん仏ぶつ曲く 鉦かね方の一人が導師となって鉦の拍子で「発願文」を唱え、終ると念仏となり称名に合せて鉦と白ハリ太鼓(豆太鼓)が拍子を打つ。

○つつて(太鼓曲) 左右に分れた白ハリ太鼓方が隣同志二人一組になって笛、鉦のはやしで踊曲打をみせ、祇園祭の月鉦のはやしをとり入れたと伝え、緩急の変化が見事な曲である。

れ組数も多いことから古今を通じ中心地と自他共に許し、昭和二十八年代表して国から無形文化財に選定されました。昭和五十八年には法改正に伴ない、あらためて国の重要無形民俗文化財の指定を受けました。

現在は菅原町六齋組のみ保存継続して居り、組員は以前十五歳から三十歳迄の青年で組織していましたが、最近に至り後継者事情から年齢の制限を除々に解いて、必要人数三十余名の確保に努めています。

毎年七、八月になれば全員揃って練習し、社寺への奉納、祖先への回向等に演ずるほか、出張上演もしております。八月二十五日の氏神吉祥院天満宮夏祭当日に奉納することが、昔から最大年中行事になっています。

この奉納六齋大会は長い歴史と伝統を有し、地元は勿論京洛に存する六齋組の多くが参加し、技を競ったので、今も桧舞台として知られ、京都の夏の有名行事の一つとなっています。

## 三、六齋の実際

組員は揃の浴衣を着用し、笛、鉦、太鼓(大、中、豆)等を用い曲目に応じ数人宛が夫々分担して演じ、又特殊な芸には特別の衣裳と道具を使います。曲目には謡曲、能楽、歌舞伎、

○朝野あさの(太鼓曲) 中央に大太鼓、その左右に白ハリ太鼓並び、大太鼓が主奏し白ハリがそれをはやす曲。

○鉄輪てつりん(太鼓曲) 白ハリ太鼓が左右に分かれ、隣り同志が向き合い二人一組となって白ハリを振り回しながら表裏に打ち分ける。

○四ツ太鼓(太鼓曲打) 中太鼓四個を枠にはめて中央に据え、太鼓打が一人或は二人で四ツの太鼓を軽妙に打ちわけ、一本ブチ(掬)と二本ブチとがある。

○安達ヶ原(一人手踊) 安達ヶ原の鬼女の家に宿泊した僧が禁じられた部屋を覗いて害されようとし、危うく難をのがれる光景を手踊でみせる。

○王川おうがわ「上・下」(太鼓曲) 演者の構成が「鉄輪」と同じで、笛の変化が著しく白ブチの太鼓の表打と裏打の掛け合いが変化に富む。

○さらし(太鼓曲) 「鉄輪」と同じ構成で、隣り合う者が二人一組となり表裏の掛け合いをする。曲のはじめに一人打るところがある。

○大文字(太鼓曲動作打) 大太鼓を中に中太鼓が左右に分かれて対向しその位置で一打ちしたあと、大太鼓を中心にして円陣になり右まわりに廻りながら芸打ちする。

○祇園囃子(太鼓踊打) 祇園祭の囃子によって中太鼓が踊打ちを演じ、はじめ・なか・上げの三段からなる。鉦と笛がにぎやかに囃すのに合せて対向する二人がいろいろな所作